

書評

科学論文のミスコンダクト ▶ 山崎茂明 著

科学論文のミスコンダクト／山崎茂明 著／丸善出版
2015／A5判 160ページ 2,400円＋税

「ノーベル賞を受賞するには、何を研究対象に選び、どう攻めるか?」。分子生物学専攻の大学院生だった20代の白楽青年は、自分の頭と時間をすべて注ぎ込めば、楽勝とはいかなくてもノーベル賞はとれる、というか、とろうと考えていた。そう、十分に生意気だった。

しかし、30代前半にポスドクとしてアメリカ・NIHの国立がん研究所・分子生物学部に研究留学した時、ボスに言われたことをただで、4か月後に第一著者の「*J. Biol. Chem.*」論文原稿を投稿したのである。目から鱗だった。生意気だった白楽青年は、個人の能力・努力は必要だが、もっと大きく必要で重要なのは優れた研究システムだと気が付いた。

そして、本書は、その研究システムの本である。研究システムの1つである論文発表倫理に焦点を合わせた本である。

一般に十分伝えられていないし、教授も政府も言わないが、日本の研究倫理システムには大きな欠陥がある。アメリカにある研究公正局が日本にはない。研究倫理の専門家がとても少ない。大学は研究倫理教育をほとんどしない。研究者は研究倫理にほとんど関心がない。

山崎さん（長年の友人なのでそう呼ばせてもらう）は、論文発表倫理の日本の第一人者である。30年以上も前から生命科学系の論文発表の動態を調査し、論文投稿ガイドを書き、論文発表倫理に関するたくさんの論文・著書を書いて、日本の生命科学界に論文発表倫理のあり方を示してきた。本書では、その知識と経験をもとに、研究ミスコンダクト（ねつ造・改ざん・論文盗用・オーサーシップ問題など）を論じている。そして、研究ミスコンダクトは、研究者の誰もがかかる病気であり、感染症だと述べている。

研究ミスコンダクトは感染症だから、研究ミスコンダクト病の予防知識と診断法が普及していない日本では、多

くの研究者が軽度な事件から大事件まで簡単に罹患する。2014年の理研の小保方晴子事件は起こるべくして起こったが、この小保方晴子事件を本書の第2章「STAP細胞論文のゆくえ」で論じている。

本書は、特にオーサーシップの問題に詳しい。7章でメガ著者論文を扱い、著者が3,172名もいる2011年の論文を示している。3,172名となると、これは、「著者」ではなく「貢献者」と呼ぶべきだ。8章で共著者の順番をどうするかの問題を扱い、9章・10章でギフトオーサーシップ問題を解説している。さらに、サラム出版（13章）、レフェリーシステム（15章）など、現在の論文発表で十分な改革が行われていない闇の部分も解説している。研究論文の一回性（12章）は概念としては研究者の常識だが、では、具体的に、次回の学会発表で前回と同じスライド・図表を何割、再使用してよいのだろうか？ そもそも、学会発表した内容は必ず論文発表すべきなのだろうか？ 学会発表の何パーセントが論文発表されたのかという学会毎の集計データを記載していて興味深い。

本書は、医学情報誌「あいまっく」の2012年から2015年の連載を中心に、他の記事を加え改訂したものである。ポイントとなる文献を的確に示し、論文発表の問題点を提示し、あるべき姿を大きな視点から解説している。山崎さん独特の静かな語り口も魅力的である。

全17章の構成で、どの章から読み始めても、章ごとにそれなりにまとまっている。また、1つの問題に絞ってキリモミ状に追及・記述するというより、研究ミスコンダクト問題を最新の観点から幅広くカバーしている。実験の合間に気楽に読めるし、読むことをおススメしたい。ねつ造・改ざん・盗用・オーサーシップなどで、研究ミスコンダクト病にかからないための予防接種をしておきましょう。

白楽ロックビル（お茶の水女子大学名誉教授）